

平成31年 第2回教育委員会会議

1 日 時

平成31年2月13日（水）

開会 10時00分

閉会 10時50分

2 場 所

教育委員会室

3 出席者

田中新太郎教育長、金田清委員、横山真紀委員、眞鍋知子委員、西川恒明委員
新家久司委員

4 説明のため出席した職員

新屋長二郎教育参事、藤村一志教育次長、升屋和夫教育次長、堀田葉子教育次長、
近岡守教育次長兼保健体育課長、岡崎裕介庶務課長、杉中達夫教職員課長、
塩田憲司学校指導課長、篠原恵美子生涯学習課長、田村彰英文化財課長

5 議案件名及び採決の結果

議案第4号 平成31年第1回石川県議会定例会提出予定案件について
(原案可決)

6 報告案件

報告第1号 教職員勤務時間調査の集計結果（平成30年10月～12月）につ
いて

報告第2号 平成30年石川県優良部活動指導者表彰（知事表彰）について

7 審議の概要

・開会宣告

田中教育長が開会を告げる。

・会議の公開・非公開の決定

議案第4号は、平成31年第1回石川県議会定例会への提出予定案件のため、地
方教育行政の組織及び運営に関する法律第14条第7項に基づき非公開とする
ことを、全会一致で決定。

・質疑要旨

以下のとおり。

報告第1号 教職員勤務時間調査の集計結果（平成30年10月～12月）について
（杉中教職員課長説明）

それでは、報告第1号「教職員勤務時間調査の集計結果（平成30年10月～12月）について」につきまして、別冊の資料によりご説明いたします。別冊の資料をご用意ください。

1 ページの「1.平成30年10月～12月の集計」をご覧ください。(1)の調査概要についてですけれども、調査期間は平成30年10月1日（月）から12月31日（月）までの3カ月であり、調査対象は、公立小中学校、県立学校、合わせて計339校のフルタイムで勤務する教職員8347名で、対象職種は校長、以下そこに記載のとおりでございます。

(2)集計結果をご覧ください。教職員の時間外勤務時間の平均を校種別で見ると、前回までの集計結果と同様に、中学校が66.4時間と最も長くなっておりますが、昨年同時期と比べて5.3時間減少しております。また、小学校が49.8時間で0.6時間の減、全日制高等学校が45.7時間で4.4時間の減となりました。一方、定時制・通信制高等学校や特別支援学校においては、若干の増加は見られましたが、昨年同時期とほぼ同じ状況でありました。

以上が10月から12月分の結果ですが、これに加えて4月から12月までの期別および月別推移も2ページ以降にまとめてありますので、そちらを使って昨年度との比較を報告いたします。

それでは、2ページをお開きください。「2.Ⅰ期（4月～6月）、Ⅱ期（7月～9月）、Ⅲ期（10月～12月）の集計」をご覧ください。表のつくりは、先ほどの10月から12月分と同様になっており、校種別に1行目には4月から6月までのⅠ期分、2行目には7月から9月までのⅡ期分、3行目にはこれらをまとめた4月から9月までの前期分、そして、4行目には今回の10月から12月までのⅢ期分のそれぞれについて、時間外勤務時間の1カ月当たりの平均と時間外勤務時間の人数分布の結果を記載してあります。

まず、1段目の小学校をご覧ください。時間外勤務時間の平均については、Ⅰ期、Ⅱ期では昨年同時期と比べて1.8時間の減であったところ、Ⅲ期においては0.6時間の減で、減少幅が少なくなっています。また、時間外勤務時間が月80時間を超える教職員の割合は、人数分布の右端とその左の数の合計で表されるわけですが、昨年同時期と比べて、Ⅰ期は3.5ポイント、Ⅱ期は2.4ポイントの減であったところ、Ⅲ期は0.4ポイントの減となり、やはり減少幅が少なくなっています。

2段目の中学校では、時間外勤務時間の平均について、Ⅰ期で6.0時間、Ⅱ期で7.3時間、Ⅲ期で5.3時間と、全ての期において、昨年と比べて大きな減少が見られました。時間外勤務時間が月80時間を超える教職員の割合についても、Ⅰ期で5.3ポイント、Ⅱ期で7.8ポイント、Ⅲ期で7.3ポイントと、こちらも昨年同時期と比べて大きな減少が見られました。

3段目の全日制高等学校におきましても、時間外勤務時間の平均について、Ⅰ期で4.9時間、Ⅱ期で5.0時間、Ⅲ期で4.4時間と、全ての期において、昨年と比べて減少しており、時間外勤務時間が月80時間を超える教職員の割合についても、Ⅰ期で9.8ポイント、Ⅱ期で6.0ポイント、Ⅲ期で6.2ポイントと、昨年同時期と比べて大きく減少しています。

一方、4段目、5段目の定時制・通信制高等学校、特別支援学校においては、昨年同

時期と比べて若干増加している期もありますが、ほぼ同じ状況で推移していることが見て取れるわけです。

3 ページをご覧ください。ここには時間外勤務時間の平均の月別推移を載せてありますので、そちらをご覧ください。昨年度同様、全校種共通して、年度当初の業務が多く、部活動の大会に向けて熱心に練習が行われた4月から6月に前期のピークがあり、夏期休業中である8月が一番短くなり、2学期が始まり、運動会や修学旅行などの学校行事が多い9月、10月に上昇し、12月に向けて下降しています。

中学校、全日制高等学校においては、すべての月において、昨年度と比べて減少しており、これは部活動休養日や活動時間の設定により、部活動指導の時間の縮減が図られたためと考えています。一方、部活動のない小学校においては、9月は夏期休業期間中を有効に使って2学期の準備等を前倒ししたことで減少しましたがけれども、10月、11月は研究発表会の準備等により、縮減がなかなか難しかったものというふうに見えています。

4 ページ以降には、小中学校については抽出調査となりますが、県立学校については全数調査である10～12月分の項目別集計の詳細を載せてあります。項目別の特徴はこれまでと同様の傾向があります。改めて個別の説明は、ここでは省略させていただきます。

なお、3月下旬に、本年度第3回目となる「教職員多忙化改善推進協議会」を開催し、調査結果を情報共有するとともに、今年度における具体の取組状況を報告することとしており、それらを踏まえ、今後の取組に生かしていきたいと考えております。

以上で報告を終わります。

(田中教育長)

やはり、10月がちょっとなかなか難しかったみたいです。9月は、今説明がありましたように夏休みの前倒しで準備をとという話もしたものですから、9月が減っていい傾向だな、夏休みをうまく使ったなと思ったのですがけれども、10月はやはりイベントや行事が多くて、結果的には思ったような結果が出ていないのは残念です。

【質疑】

(眞鍋委員)

3 ページのグラフです。どの校種もM字型カーブみたいになっているのですがけれども、8月のところはやはり一番底になりますけれども、中学校と高校を比べると、中学校はがくんと8月の数値が低くなっていますが、高校の減り方がそうでもないなという感じなのですが、これは何か理由があるのでしょうか。

(杉中教職員課長)

精緻な分析をしているわけではありませんけれども、これは去年と同じ形としてまず言えることは、小学校の減り方に比べて中・高があまり減らないということに関しては、やはり部活動が一つ影響をしていて、部活動もインターハイが行われたり、いろいろな大会の際に土曜や日曜についても競技が行われているということがありますので、そういう部分についてなかなか減らない。とりわけ高校の場合には、大会以外にもあり、県外の遠征であるとかそういうようなものでも土日を含めて遠征等に行くと、教員の勤務

としては、その時間は普段の勤務時間以上に子どもたちの指導を行っています。就寝時間までの間はやはり仕事の時間というようなカウントをしているので、そういった面ではなかなか減りにくかったのではないかなというふうに考えています。

(眞鍋委員)

分かりました。ありがとうございます。

(金田委員)

9ページの「担任の状況」というのは一番大事ではないかなと思っているのです。小・中・高となっていますね。小学校、中学校の担任の状況を見ると、校務分掌が小学校は16.4%、高校は16.2%なのでそんなに大きくは変わらないのだけれども、中学校の28%というのは、生徒指導とかそういう一つの校務分掌だけではなくて、学年会とか生徒指導委員会とかでいろいろなそういうものが合わされた数字になってくるのでしょうか。この28.0%というのは。これはどういう形なのでしょうか。

(杉中教職員課長)

ここに出ているのは時間外勤務の中でそれに費やした時間がどれだけあったかという部分ではありますけれども、校種別に見ると、小学校や高校に比べて中学校の校務分掌にかける時間がやはり多くなっている。その中には、今、委員からのお話にもありました生徒指導であるとか、担任のそういういろいろな対応であったりということについても全てここに入ってきていますので、そういう部分に多くの時間が割かれているのではないかなというふうに思っています。

(金田委員)

中学校が非常に校務分掌が突出して大きい。

(田中教育長)

多分、時間外に追いやられているということでしょう。時間内に全くできていないということだと私は思います。部活動も大変熱心にやっていますし、生徒指導やら保護者対応もいろいろあって、結局自分の事務的な仕事をするのが時間外にだいたい出ている、あるいは土日に出てきてとかというような話になっているのではないかと思います。中学校は完全に教員の数、今言いましたけれども、知事も言っていましたけれども、中学校はやはり教員の数が少なすぎるのだと思います。

(金田委員)

私も出が高校だからちょっと言いにくいのですが、高校の部活動も含めて、中学校と7時間ほどの差が出ているのですが、教材研究がこの差で、一概にこの二つだけの数字で要因を比較するのは難しいと思うのだけれども、高等学校の教材研究というのは恐ろしく低く出ています。自分のことを言っているみたいな感じなのだけれども。

(田中教育長)

子どもも自立しているし、高校の場合は、まず私らが個人的に思っているのは、受験

で一通り学力もならされていますよね。小・中は結構、できる子とできない子がいろいろ混じっている中で教材も工夫しないといけない。だから、教材研究にも時間がかかるのは、私は当然だと思います。高校はそこが、高校受験という形でそれなりにできているということと、やはり子どもも自立し成長している分だけ、勉強を教えるときにも少し合理化が進んでいるのだらうと思います。やはり、中学校、小学校になればなるほど、一人一人に合わせて教材もいろいろと工夫しないといけないというのがあるのではないのでしょうか。一般論ですけれども。

(金田委員)

そう言っていただければありがたいですけれども。

(横山委員)

金田委員のお話と関係があるのですが、8ページの「男女別」というところで、部活動以外の、部活動の左の教材研究と校務分掌の割合が、男性が校務分掌、女性が教材研究が少しずつ高いという形でできている中で、高等学校の、大体その割合的にそれぞれ均等に、教材研究の分、校務分掌が男性が高いみたいな形の中で、高等学校の教材研究だけ、男性と女性の差が他に比べるとちょっと高い気がして、ここはどのような。

(田中教育長)

ここはまだちょっと分析し切れていないですね。
何かありますか。

(杉中教職員課長)

正直に言いますと、分析は十分にできていません。ただ、この男性、女性の中には、管理職であったり教諭であったりというのは、全部ここに入れ込みで見ているということになりますと、どうしてもやはり男性の中で管理職になっている方は校務分掌の方がどうしても主になっているということが一つ影響はしているのかなというふうに思っています。教諭の中の男性と女性という形で、今、見てあるわけではありませんので、そういうものも少し影響しているのかなというふうに。

(田中教育長)

そういうことも少し、今後は分析していかなければと思っています。さらにもう少し、1年間、いわゆる前年比較がきちんと1年ずつできるようになるので、去年委員の皆さんからもご指摘を受けたように、もう少しいろいろな角度からの分析をまた、今後やっていきたいと思っています。

(新家委員)

先ほど、6ページから等々の話の中で、残業時間でこういう種別で分けたという話ですよね。われわれは、総労働時間の中で物事を考えるべきではないのかなというふうに。うちですと、8時半始業で5時までなのですけれども、8時半始業で5時までもきちんと仕事をしていて、それでプラスアルファで残業をしているわけなので、そういう労働時間の中でどういう時間の割り振りになっているかということを考えないといけない

のではないかなと少し思っていますので、これから分析されるときに、そういうデータもあれば、全部というとは多分しんどいと思うので、気になるところはそういうデータをつくっていただけるとありがたいです。

(田中教育長)

おっしゃるとおりですね。問題は、先生によって授業を持っている時数がばらついているので、結局いろいろな意味で個別の状況も出てくるので、それと大規模校と小規模校とではちょっとまた違ってきます。今は、まず時間外にはみ出している分が何かという話から入っていますが、おっしゃるとおりなので。文科省あたりは総労働時間でデータを発表したりしていますけれども。

(金田委員)

私はやはり、部活動に対する考え方というか配慮もなされてきていいことだと思うのですが、教員というのは、教材研究の時間でもって最後は見られるのではないかな。だから、教材研究が十分にできないような、そういう体制であったりすると、先生自身も問われるし、あるいはそういう組織も問われてくることになってしまうので、やはり教材研究の時間は十分勤務時間内に確保されるような形はお願いしていかなければいけないと思います。

(田中教育長)

理想はそうですね。

(金田委員)

はい。

(田中教育長)

あとは、教材研究は今までどちらかというところと一人一人が自分の教材を開発していたということもあるので、そこは組織的にやはり教材の共有化、いいものはまねすればいいので、「私だけの教材」というそれにプライドをかけている先生もいるという話も聞きましたけれども、それは駄目なので、子ども達みんなに、いい教材ならみんなで共有して使えばいいというので、まさに組織で教材を開発するという話なので、ここはもうちょっと教材の共有化とか、学年単位できちっと、あるいは教科単位でみんなで工夫して教材を作り、それをみんなで活用するということがいいのかなと。だいぶ進んできつつあるというふうには聞いていますけれども、そこをもっともっとやっていく必要があるのだらうと思います。職人技でなくて。

もう少しまだ途中なものですから、先ほど言いましたように、1年間1年間きっちり比較する段階で、少しデータの加工も。基のデータさえあれば加工はできるので、それをまた現場の先生に全部内訳を書かせて報告させるという、これはまた多忙化に関わるので、なるべくこちらで加工はしてみたいと思いますけれども、またそんな分析の努力もさせていただきたいと思います。

(金田委員)

今、言われたみたいに、学校現場に下ろすのではなくて、委員会は大変だけれども、委員会の方でやはりやっていただければと思います。

(田中教育長)

教頭には少しお手伝いいただくことにはなると思うのですが。

報告第2号 平成30年石川県優良部活動指導者表彰（知事表彰）について
（近岡守教育次長兼保健体育課長説明）

報告第2号「平成30年石川県優良部活動指導者表彰」について、ご説明いたします。
14 ページをお開き願います。

この表彰は、学校部活動等の指導者として、特に優秀な教職員を表彰し、その功績をたたえるとともに、本県教育の振興、発展に資することを目的に実施している知事表彰であり、本年は、運動部16名、文化部3名、合わせて19名の指導者を表彰することとしております。

言うまでもなく、部活動は、学校教育の一環として位置付けられ、体力や技能の向上はもとより、協調性や責任感、自主性を育むなど、生徒の人間的な成長にも大きな役割を果たすものであります。

表彰される19名は、いずれも日々の指導の中で生徒との信頼関係を深め、本県生徒を全国大会等において優秀な成績に導くなど、各部門において卓越した指導力を発揮した指導者であります。今回の表彰を新たな契機として一層の指導力の向上に励み、今後ますます活躍してくれるものと期待しております。

なお、表彰式は2月18日に県庁で行うこととしております。

次のページに、被表彰者についての大会の実績等を、参考資料として付けさせていただいております。

以上で説明を終わります。

（田中教育長）

参考資料に載っております評価の対象になった実績等、ご覧になっていただければと思います。

【質疑】

質疑なし

（田中教育長）

以降の審議は非公開となるため、傍聴人の退席を促す。

議案第4号 平成31年第1回石川県議会定例会提出予定案件について
岡崎庶務課長が説明し、採決の結果、全会一致で原案のとおり可決された。

- ・閉会宣言

田中教育長が閉会を告げる。